



有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家  
写真は内モンゴルのウランホト駅にて(筆者撮影)

### 宣弘社

団塊の世代から六十代後半の精神形成をしたのは『月光仮面』であり、『豹』の眼』であり、『怪傑ハリマオ』だろう。いずれも宣弘社プロダクションの制



宣弘社社長だった小林利雄

飾美化広告を兼ねた仕事も宣弘社、上野駅のコンコース、猪熊弦一郎の大壁画「自由」も手がけている。

宣弘社は、独自に国産初のテレビ映画『月光仮面』を製作する宣弘社プロダクションを設立した。『月光仮面』から『隠密剣士』、『ウルトラQ』、『ウルトラマン』、『柔道一直線』など子供たちに強烈な記憶を



月光仮面とドクロ仮面

作である。ゴジラが東京を襲うとき、銀座の輝くネオンが映る。そのネオン広告の独擅場が、広告代理店宣弘社であった。大阪戎橋、博多の中州のネオンもそうである。国鉄の駅の装飾美化広告を兼ねた仕事も宣弘社、上野駅のコンコース、猪熊弦一郎の大壁画「自由」も手がけている。

宣弘社は、独自に国産初のテレビ映画『月光仮面』を製作する宣弘社プロダクションを設立した。『月光仮面』から『隠密剣士』、『ウルトラQ』、『ウルトラマン』、『柔道一直線』など子供たちに強烈な記憶を

### 西村俊一(一九二八〜九五)

三作品のプロデューサーだが、『豹の眼』では御手俊治名で脚本も担当した。嵐寛寿郎の綜芸プロから東京に在籍していたが、宣弘社に移り、大活躍することになる。

その後、東宝、電通関係者が立ち上げた制作会社C・A・Lに参加する。一九六九年から四二年つづいた『水戸黄門』や『大岡越前』、『木枯らし紋次郎』などは、彼の仕事であった。

### 船床定男(一九三二〜七〇)

『月光仮面』から『隠密剣士』へとほとんど一人で撮りまくった超人船床監督は、綜芸プロの友人、西村俊一に呼ばれ、二七歳でいきなり監督を委せられた。伏見区に満洲事変翌年に生

### 『豹の眼』(一九五九〜六〇)

まれる。東映での『隠密剣士』(正統一九六四、『ワタリ』(二九六〇)も含め、ズームレンズとストップモーションの多用によるテンポの良さとスピード感がたまらない。子供にも監督の名前から作品の良し悪しが判断できることを教えてくれた。余りにも多忙の末、四〇歳で喉頭ガンで亡くなった。

原作は、のちに『怪傑黒頭巾』を書く尾道出身の高垣暉(たかき)一九二七年に『少年倶楽部』に連載された。インカ帝国の末裔黒田杜夫(モリー)、父が清の皇族恭親王殿下の少女錦華を軸に、太平洋をサンフランシスコに向かう船上からインカの秘宝の眠るアリゾナへと物語は展開する。

テレビ化では、これを義経ジングスカン伝説に改変した。義経は奥州の衣川で死なず、蝦夷からシベリア、旧満洲、モンゴルへと渡り成吉思汗になったという伝説である。笹竜胆(ささりゅうたん)源氏の紋所を白頭巾につけた白装束、忍者まがいにモリーは変装して活躍する。モリーはジングスカンの末裔、船上の戦いは香港から日本への航路上となる。



勝木敏之演じるハリマオ

ベニヤ板に銀紙貼り、それらしきメーター類をつけた器械を白衣を着て操作した。いい年をした大人たちが、平日に富士山くんだりまで来て、「何っ!! 東京にも怪獣が出たか!!」なんて言っている。こういう世界が私は大好きである。

小林利雄(一九二二〜二〇〇七)一九二一年、静岡生まれ。敗戦直前に招集され、内モンゴルの呼和浩特に送られる。郊外は広大なケシ畑で、このアヘンが関東軍の軍資金となった。

敗戦翌年、山西省から佐世保に復員。父より中村宣弘社を引き継ぐ(のち宣弘社に改称)。当時、東京は浮浪者、戦災孤児、空襲で家を失くした人々で溢れていた。その暗い街をネオ

主役は月光仮面につづいて、のちに隠密剣士秋草新太郎も演じる大瀬康一。高千穂ひずるとの結婚の仲人は小林利雄が務めた。

『怪傑ハリマオ』タイ、カンボジア、香港にロケをした最も東南アジア色の強い作品。これらの土地は小林利雄がネオンサインを設置した場所とも重なる。

大映は大作『シンガポール総攻撃』(一九四三)をマレー半島で製作、せっかくだからとおまけでもう一本

ンで明るくしようと、一九五五年、欧米の広告事情視察ののち、ネオンサイン事業に着手した。

『月光仮面』(一九五八〜五九)川内康範作詞、小川寛興作曲の主題歌は、今も歌いつがれている。子供の頃、原作の川内康範と川端康成は同一人物だと思っていた。『雪国』と『月光仮面』の作者は川端康成だった。

『怪傑ハリマオ』までの宣弘社三作の特徴は、モンゴルからマレー半島の「大東亜共栄圏」に関わりがある。『月光仮面』第二部で、サタンの爪は「俺はパラダイ王国の秘密を追って、はるばる東南アジアからやって来た」と言う。

撮ってしまう。それが『マライの虎』で、結果、こちらがヒットしてしまう。

主題歌を歌ったのが、満洲按山(アハシヤン)の図書館努めから歌手になった東海林太郎である。その前年には上原敏の歌った「マレーのハリマオ」も大ヒットした。上原は秋田県出身、ニューギニアで三五歳で戦死している。ハリマオのモデルとなった谷豊(たみや)は軍部によって徹底的に軍国美談としてまつりあげられた。

東海林版の島田馨也(きんや)の詩は六番まで「ハリマオ、ハリマオ、マライのハリマオ」と繰り返される。これが、今も歌いつづけられる小川寛興作曲の主題歌の「ハリマオ、ハリマオ、僕らのハリマオ」として引きつがれた。(この項つづく)